

書評
菅磨志保・山下祐介・渥美公秀 編
『災害ボランティア論入門』
(弘文堂)

高 野 尚 子

(特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク)

本書は、主に阪神・淡路大震災以降、災害ボランティアにかかわってきた研究者や実践家によって執筆された災害ボランティアに関する入門書である。災害ボランティアとはどのような存在なのか、また、災害ボランティア活動が展開されるようになった社会背景とはどのようなものなのかを、初めてこの世界に足を踏み入れる人にもわかりやすく論じている。そして、入門書であると同時に、これらのテーマを深く追究し、問題提起した専門家向けの書でもある。

本書は大きく分けて、「理論編」、「実践編」、「思想編」の三部から構成されている。まず始めに「理論編」として、現代社会における災害ボランティアの興隆について理論的に分析している。具体的には、社会が変容する中で現れた災害ボランティアの役割をいわば鳥の目で概観し、次に、現場でのボランティアの活動論理を虫の目で考察し、最後に阪神・淡路大震災後14年間の災害ボランティアを取り巻く動向についての試論を提示している。「理論編」に続く「実践編」では、災害ボランティアの活動が実際にどのように展開されてきたのかを詳細に報告している。特に、阪神・淡路大震災の経験によって災害ボランティア活動が体系化しつつ変容してきた様子を丁寧に記述している。「理論編」に対して「実践編」を据える書は他にも見られるが、本書はさらに最終部に「思想編」を設けているところが特徴的である。この「思想編」では、そもそもボランティアはどうあるべきかといった点や、そのあり方自体を問うている。

ではより詳しく内容を見ていこう。「理論編」の第1章では、現代のリスク社会におけるボランティアの位置づけについて述べられている。本章の著者の山下祐介によると、「リスクとはまだ見えぬ危機のことである(p.56)」という。つまり、現代は戦中戦後の状況から考えれば、原子力事故やテロの可能性など、よっぽどまだ見えぬ危機に備えなければならない状況にあり、

その意味でリスク社会と呼べるのである。では、昔から起こってきた災害はどのように捉えたらよいのかというと、その災害の問題でさえも、以前とは異なり、環境問題や人口問題などと密接に絡まりあうようになっている。そして、こういった背景に加え、この 50 年ほどの間に村などの小さなコミュニティの機能が解体していき、共同性が希薄になってきたと山下は言う。リスクの本質を見抜きながら、安心を確保するために新たな共同を組み上げて対処しなければならないときに、1 つの新しい社会的共同ツールとして現れたのがボランティアなのである。ボランティアは、自由で主体的な立場によって、リスクの本質を見抜き、新しい共同性を作りあげていける可能性があるというのだ。第 2 章では、災害直後の救援段階から復興段階、そして平常時における災害ボランティアの活動を端的に整理しつつ、その活動の論理について述べている。災害ボランティア活動は、①災害時に人々の間には非常時であるという規範が形成され、②その規範のもとで一時的な助け合いの仕組みである「緊急社会システム」が立ち上がり、③その中で不特定多数の人々が新たに発生した問題に対応する、という具合に展開されるという。本章で特に印象的なのは、自身も阪神・淡路大震災のボランティア活動現場にかかわってきた著者の菅磨志保が、ボランティア活動をつぶさに論じながらも、「実際のボランティア活動の現場で気づかされることは、その活動がどのような役割を果たしているかということよりはむしろ、援助者として被災者とどう向き合い、関係を取り結んでいくのかという側面である(p.80)」と記していることである。さらに、活動の論理や効率化の前に、「相手にどう関わるのか、関われるのか、その意味が問われる活動であることに留意したい」という言葉は、彼女が現場に向き合う際の真摯な姿勢の表れであり、災害ボランティアを実践する者にとっても、研究する者にとっても、心に刻むべき言葉ではないだろうか。そして、第 3 章では、菅同様、災害ボランティアの現場に身を置きながら考えをめぐらせてきた渥美公秀が、14 年間に及ぶ災害ボランティア活動の経緯を整理し、その活動を成立させてきた社会の動向についての論を提示している。渥美は、被災者を中心に考え、臨機応変に対応できるはずのボランティアが、この 14 年の間に既存の体制へ組み込まれ、秩序化されようとしていることに懸念を感じている。その現状を打破するのが、被災者の身体に直接触れあいながら足湯を提供する活動や、中越沖地震を契機に立ち上がった被災者に寄り添う活動であるという。前章の菅の言葉と同じように、効率化や秩序化の波に飲まれてきたボランティア活動だが、ふたたび被災者と向き合う関係の重要性に立ち戻り、原点に回帰したといえるだろう。

以上のような重厚な「理論編」を経て、「実践編」では、実際の災害現場でのボランティア活動の様子が丁寧に記されている。「理論編」でしっかりと地を固めているために、「実践編」の内容の理解も進みやすくなっている。この「実践編」では、阪神・淡路大震災時の活動の整理はもちろんのこと、「災害ボランティアと情報」という観点から、ボランティアが被災者に必要な災害時の情報提供にいかにかかわってきたか、ITが情報提供にどのように貢献してきたかという点も実例をもとに書かれている。また、さらに新潟県中越地震の現場において展開されてきた復興支援の現状も、地元で地に足の着いた活動をしてきた稲垣文彦によってまとめられている。この中で、中越の経験が、過疎・高齢化が進む地域の問題を浮き彫りにしたことがわかる。

駆け足で見てきたが、最終部の「思想編」は、閉めの言葉であると同時に、編者から読者へ向けてのメッセージであるともいえる。「思想編」の執筆者の一人で、阪神・淡路大震災以降、現場に根ざした活動を継続してきた村井雅清は、災害直後から復興過程において「最後の1人まで救う(村井 2006)」という固い信念をメッセージとして発し続けている。災害ボランティアが考えるべきことは、「できるだけ多くの人をどうやって救うか」ではなく、「ひとりひとりをどうやって救うか」なのである。そして、ボランティアが被災者ひとりひとりに対して「ただ傍にいたいこと(渥美 2001)」から、その一歩が始まるのであろう。さらに言えば、ボランティアにとっては、その経験によって、「震災の被害は自分に起こりえたかもしれない(e.g., 高野・渥美 2007)」と感ずることもある。

最後に、阪神・淡路大震災の経験と教訓を伝える施設に勤めた評者の立場から一言加えて終わりとしたい。評者は、2009年3月まで阪神・淡路大震災に関する資料展示を行うとともに、震災や災害の資料収集を行っている「人と防災未来センター」において、震災資料の整理と利活用をすすめる業務を担ってきた。当センター資料室には、3万点以上の震災・災害関連図書、雑誌、ビデオなどが開架されている。その中には、もちろん阪神・淡路大震災関係の資料が多くあるのだが、震災から14年が過ぎた現在では、阪神・淡路の問題を改めて正面から取り上げた刊行物は顕著に減っているように感じる。本書は、その経験と得た知恵を今だからこそ各著者が振り返り、その上で現在の問題を見据える意欲的な書である。現場と研究畑の第一線を走りながら、本書をまとめあげた執筆者らの労をねぎらうとともに、本書を世に送り出してくれたことに感謝したい。

【参考・引用文献】

渥美公秀 2001 ボランティアの知 大阪大学出版会.

村井雅清 2006 たった一人を大切に 柳田邦男・大賀重太郎・黒田裕子・村井雅清 ボランティアが社会を変える－支え合いの実践知 関西看護出版, 113-178.

高野尚子・渥美公秀 2007 阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察－対話の綻びをめぐって－ 実験社会心理学研究 46(2), 185-197.